

『オセロー』は人種の悲劇か

オセローの悲劇にみる男性性喪失への恐れ

鍛冶佳穂

ウィリアム・シェイクスピアの戯曲『オセロー』は、近年ではもっぱら人種の悲劇と目されており、オセローの他者性を中心とした作品解釈が主流となっている。しかしながら、本作の悲劇が起こった要因には、他者性以上に、シェイクスピアが生きた16世紀を境に生じた、男性性に対する価値観の変化が大きく関わっているように思われる。本発表では、男らしさの規範の変容という視点から、本作の悲劇の要因を再考した。

近代への過渡期といえる16世紀において、その他の多くの価値観がそうであったように、男らしさの理想像もまた、大きな変化の途上にあった。古代から男らしさの第一条件とされてきた力強さや勇敢さといった性質に代わって、それまではむしろ女性的なものと考えられていた優美さや礼儀正しさが、男性に相応しい性質と見做されるようになっていったのである。しかしながら、このような変化は基本的に敵の存在しない平時のみに留まり、戦の際には、未だ力強さや勇猛さといった性質が重視されていた。すなわち、平時には優美さを旨とする新興の男らしさが、戦時には荒々しい力強さを旨とする旧来の男らしさが、それぞれ賞賛の対象となったのである。

本論では、このような背景を踏まえたうえで、悲劇の最大の要因である、オセローのだまされやすさとイアーゴの動機をそれぞれ検証してゆく。オセローがなぜあれほど容易くイアーゴの罠にはまってしまうのかという問いはこれまで多くの先行研究で提示されてきたが、近年では、デズデモーナとオセローとの間の年齢や階級の差、そして人種の違いを指摘することによってオセローのコンプレックスを刺激するイアーゴの手法や、イアーゴとオセローが女性全体に対する不信という父権制的なミソジニーを共有していることなどをその理由とみなすのが主流となっている。しかし、ここで留意したいのは、一幕三場において、ブラバンシオが“in spite of nature, / Of years, credit, everything — / To fall in love with what she feared to look on?”(1.3 97-99)などの台詞で人種や階級、年齢の違いを強調した上で、父権制に対する裏切りを理由にデズデモーナの裏切りを警告した際には、オセローは一顧だにしていなかったということだ。オセローがイアーゴの言葉を信じた最大の要因が上記のようなコンプレックスであるならば、その弱点を突いたブラバンシオのこの一連の台詞にも動揺を見せて然るべきであろうが、オセローの返答は冷静そのものなのである。ところがどういふわけか、三幕三場に至ると、類似したレトリックを用いたイアーゴの言葉に、彼は途端に動揺してしまう。以上のことを鑑みれば、一幕三場と三幕三場の間に、オセローの心境に何らかの変化が生じ、デズデモーナへの信頼を失わせたという解釈が成立しうるだろう。ブラバンシオの警告とイアーゴの唆しとの間にオセローの身边に起こった変化は大きく分けて二つ、戦争の終結とキャシオーの失脚である。注目すべきは、この二つの変化によって、オセローは、デズデモーナが魂と運命を捧げたと公言する「名誉と雄々しさ」(his honours and his valiant parts)を完全に失ってしまうということだ。

二幕一場で、オセローの到着を待たずしてトルコ軍は全滅し、戦争の危険は去る。優美さを重んじる新しい規範が歓迎される平和が訪れたのである。言葉の端々に戦における功績や腕っぷしの強さへの誇りが垣間見える一方で、「柔らかな物腰」(3.3 267-8)に欠けることを自認するオセローは、戦時に求められる資質は備えているものの、平時に求められる資質を欠いている。戦が終われば、力強さや勇敢さを重視する旧来の規範に根差した彼の「雄々しさ」の価値は失われ、男らしさと深く結びついた「名誉」は、優美なマナーを身に着けたキャシオーのような人物にふさわしいものになってしまうのである。

とはいえ、この時点では、オセローの「名誉」は完全に失われてしまったわけではなかった。力強さが優美さに席を譲った新しい規範の下でも、妻に対する絶対的な支配は男らしさの重要な条件であったから、デズデモーナが夫に服従する従順な妻である限り、オセローは「男らしい男」であり続けられるのである。しかし、イアーゴの計略によって、失脚したキャシオーの弁護をデズデモーナが引き受けたことで、彼はこの最後の抛り所をも失ってしまうことになる。デズデモーナは、“I'll watch him tame and talk him out of patience”(3.3 24)と、キャシオーの復職を渋るオセローを「しつけ」ようとするが、鷹の調教に由来するこの表現は、ふつう夫が妻に対して使うものだった。つまり、デズデモーナは、夫が妻に対して負うべきだとされていた役割を引き受けようとしているのである。さらに、オセローは、このような態度に反発するどころか、“I will deny thee nothing”(3.3 77; 84-5)と繰り返し、服従の姿勢を見せる。オセローとデズデモーナの関係は当時の社会における「自然」から逸脱し、夫婦の役割が逆転してしまったのである。オセローとデズデモーナの結婚を「自然に反

した」ものだとするイアゴの言葉(3.3 232;233-242)が効力を発揮するのはこのためであろう。

以上のように、戦争の終結と役割の逆転によって、オセローの男らしさ、曳いては「名誉と雄々しさ」は完全に失われ、物語の序盤にはありそうもないことに思えたデズデモーナの裏切りの可能性が現実味を帯びてくるのだ。“Nobody — I myself.”(5.2 123-4)というデズデモーナの謎めいた台詞は、「名誉と雄々しさ」に魂を捧げたと公言する一方で、男性の役割を担うことによってオセローの「男らしさ」を喪失させたデズデモーナ自身の行動が悲劇を決定づけたということを仄めかしているといえるのではないだろうか。イアゴは、奸計を実行に移す直前、オセローとデズデモーナのことを音楽に喩えて次のように独白する。“I’ll set down the pegs that make this music, / As honest as I am.” (2.1 195-6) “peg”は楽器の弦を指すが、同時に男性器の含意もある。従って、この台詞は、オセローを去勢することでデズデモーナとの関係を崩壊させるという宣言とも取れるのである。イアゴが価値観の変容に伴う男らしさ喪失の危機を、オセローとデズデモーナとの関係を崩壊に導く鍵と見做して意図的に利用したことの証左といえよう。そして、次に述べるように、男らしさの規範の変化とそれがもたらす影響は、本作の悲劇のもう一つの大きな要因であるイアゴの動機に深く関わっている。

コールリッジ以降、多くの批評家達が、イアゴの動機の欠如を指摘してきた。しかし、イアゴは一幕一場で、オセローが自分ではなくキャシオーを副官に取り立てたことへの不満を言い立て、“Now sir, be judge yourself / Whether I in any just term am assigned / To love the Moor?”(1.1 37-40)と締めくくっているのだから、彼の憎しみはこの出来事に端を発していると考えられるべきだろう。作中で lieutenant という単語が登場する 25 回のうち実に 15 回がイアゴの発言であることから、この役職に対するイアゴの執着がうかがえる。(Neill 31-2) しかし、昇進の機会を一度逃したという事実は、一見、これほど大掛かりな復讐を企てるほどの憎悪の理由としては弱いように思える。なぜイアゴは副官という地位にこれほど執着しているのだろうか。おそらく、イアゴにとっては、昇進の機会を逃したこと以上に、自分からその座を奪ったキャシオーの人となり重要な意味をもっていたのではないか。世界各地で活躍したことを誇りにする歴戦の軍人であり、「悪口だけが取り柄」(2.1 119)と自称する無骨なイアゴに対して、キャシオーは実戦経験には乏しいものの宮廷人らしい優雅な作法を身に着けた伊達男である。いわば、イアゴは影響力を失いつつあった旧来の、キャシオーは新しい男らしさの規範を象徴するような人物なのだ。とすれば、いまだ旧来の規範が歓迎されていた戦場は、イアゴにとって自分の価値 (price) が認められる貴重な居場所 (place) だったはずである。しかし、オセローはイアゴではなくキャシオーを昇進させた。イアゴにしてみれば、これは戦場においても、新しい規範が古い規範に勝るという宣告がなされたようなもので、自分の居場所を奪われ、価値を否定されることに等しかっただろう。「キャシオーの栄華(a daily beauty in his life)はおれを無様(ugly)にする」(5.1 19-20) という台詞は、このような関係を端的に表している。ゆえに、彼は“I know my price, I am worth no worse a place”(1.1 10)という、“price”と“place”の結びつきをことさらに強調する言い回しで人事の不当を非難するのだ。キャシオーを戦の経験や知識に関しては「若い娘同然」(1.1 21-3)の男だと揶揄し、彼の優雅な所作を見るや、“I will gyve thee in thine own courtship”と嫌悪をあらわにすることからも、新しい規範を体現する「女々しい」男が軍隊で出世したことに対する反感が見て取れる。このように考えれば、イアゴの復讐の方法にも納得がいく。彼のやり口は、キャシオーに対してはその「男らしさ」即ち優美さをデズデモーナとの浮気の証拠に変えることでその価値を失わせ、それによって軍内での居場所を失うように仕向けることであり、オセローに対しては、先に述べたように「男らしさ」を喪失させることだった。つまり、彼の悪事は、オセローがキャシオーを副官に選んだことによってイアゴ自身が被った「男らしさ」と「居場所」の喪失を、両者に味わわせることを目的としているのだ。当時の社会において、妻の不貞は夫から男らしさを奪うことであつたということを鑑みれば、その信憑性のなさからこれまで多くの批評家によって動機の欠如の根拠として論じられてきた、「オセローとイアゴがベッドで自分の代わりを務めたのではないか」というイアゴの疑念 (2.1 285-90; 298) も、「オセローとキャシオーのせいで、自分は男性性を失ってしまった」という彼の意識を表わしていると考えられるであろう。

以上のように、オセローの悲劇を引き起こしたのは、男らしさの規範の変容によって自身の価値を脅かされる、旧来の男らしさの体現者たちの不安や憤りであったといえる。だからこそ、動機を問われたイアゴは、オセローに向かって、まるで共犯者に向けるような言葉 (“what you know, you know.”(5.2 301)) を投げかけるのだ。即ち、イアゴの復讐とオセローのデズデモーナ殺害は、動機を共有しているのである。

引用文献

Neill, Michael. Introduction. *Othello*. Ed. Michael Neill. Oxford University Press. 2008. 1-179

Shakespeare, William. *Othello*. Oxford University Press. 2008